

文献史料文書に見る

シャーロット・B・デフォレスト女史

若 山 晴 子

本稿がいささか照準の定まらぬ体裁をとるにいたったのは、故なきことではない。神戸女学院第五代院長シャーロット・B・デフォレスト女史の帰天十五周年を迎えたことにより、女史に関して若干の記述を求められる機会に遭遇したものであるが、これは、すでに手をつけた学院創立者たちに関する研究とは逆の意味で、それに勝るとも劣らぬ難しさを内包していることにより、現時点における筆者の手に余るものとなったためである。

その難しさは、まず第一に、女史の時代が近すぎることにある。女史を知る人々は多く、その記憶は生々しく、残された記録は創立者たちの頃とは比較にならぬほど多いが、その大方は未だ史料たるべく整えられていないからである。そして筆者自身が、神戸女学院創立八十五周年の式典の折りに遠くからただ一度かぎりとは言え、お見受けした方を、純粹に歴史上の人物として昇華してしまうには至っていないのを感じるからでもある。

第二は、デフォレスト女史自身のアルシヴィスト風の性向による。これは非常にすぐれた資質であって、その成果は、“*The History of Kobe College*”の叙述に際しても遺憾なく発揮された。米国伝道会宣教師文書の厩大なファイルの検索引証における綿密さはその一例である。そしてこの性向は、女史の日々の業務に対しても変わることなく、女

史の長い在任期間中にその手元に集められた文書類ぶんしゅは全て、史料文書もんじょたるべく残されたのである。女史自身が多筆であつて、書き残されたものも多い。従つてこれら全てを短時日に漁りつくすなどということは、全くの不可能事であつた。

それ故本稿は、現段階で用い得る限られた史料及び記録に據つて試みられた、デフォレスト女史に関する爾後の報告の前哨として、御参照いただければ幸いである。

一、シャーロット・B・デフォレスト女史の誕生と永生

誕生の時 「来日して以来毎年、春の天候は我が身の内に一種の潜在マラリアのようなものをひきおこします。苦

痛はありませんが、私の頭を事実上使いものにならなくしてしまいます。それで私は、いまいまでも怠惰であるという、およそ羨望に価しない快楽を知ることになりました。これと言つて目につく原因は何もなかったのですが。…」

米国伝道会日本派遣宣教師ジョン・ハイド・デフォレスト博士 (Rev. John Hyde DeForest) は、一八七九年二月十五日附の書簡をこのように書き出している。日本赴任後大阪に住んで四年、この布教地から伝道会ボストン本部のクラーク博士 (Dr. Nathaniel George Clark, D. D.) に宛てた三〇通目 (通算三七通目) の手紙である。

同じ大阪伝道区の宣教医テイラー博士 (Dr. Wallace Taylor) の丸薬を「折り折りに服用すること」と毎週土曜日の山歩きを「宗教的に遵守すること」とにより、今年は過去四年間よりも快調ではあるが、「伝道団の中には、頭痛、眼精疲労、消化不良、そして日々の仮借なき勉強が山積みで、また夜昼同情心が張りつめて」いるので、この山歩き

は他にも大いに勧めたいところである——との考えをもって、デフォレスト博士はこの便りを書き出したものであった。

「今日はまた土曜日です。しかし悲しい哉、雨が、私の恒例の道の遵守を妨げています。けれども私の思いはなお山上にあります。それで私は、我が栄光の務めについてではなく、私の山歩きの一端について、お話し上げたいという気になりました。」

しかしこの書簡は、結局のところそれだけでは終わっていない。しかもその投函は少なくとも一〇日は遅れ、同月二十五日附の実に長い追伸を附されて送り出された。そしてこの長い追伸の冒頭を飾ったのが、シャーロット・バークス・デフォレスト女史(Miss Charlotte Burges DeForest)誕生の知らせであった。もっともその事に関わる記述は、手稿にしてほんの五行にしかすぎないのであるが……

「伝道団の爾後の財政上の困難につき長い追伸を書くにあたり、二月二十三日シャーロット・バークス誕生のこと、御通知申し上げます。博士には——、本当にお気の毒ですが、これが、私の為し得る最高のおわびであります。」

情緒的な言辞の全くないこの短文は、しかしながらその文脈構成の妙によって、二女の父となったばかりのデフォレスト博士の深い感動を十二分に伝えて余りがある。

デフォレスト博士の書簡には、終始このような色調があった。ここに引いたいくつかの章句からも窺い知れようが、全くユニークな言葉選びが何の気負いもなしに積み重ねられることにより、そこはかとないユーモアと温か味とが醸し出され、読み手はくつろいだ表情のまま博士の論の中に入ってゆくことができるのである。そしてこれは、博士の愛娘シャーロット・バークス女史が晩年になって日本語で書きおろした『わが心の自叙伝』への寄稿の文体の中にも匂いたつ、和やかな魅力と相通ずるものにちがいはなかった。

生涯の道 それから二か月余りのちの五月十二日、デフォレスト博士の書簡はその愛娘の受洗のことを報じた。

「昨日、第一教会は特別の良き一時ひとときを持ちました。ニーシマが来て、説教をし、また私たちの赤ん坊を含む四人に洗礼を施してくれたのです。」

ニーシマとは、同志社の創立者新島 襄。四年前の秋、同じ米国伝道会の任命を受けて日本に帰る彼と同じ船で、デフォレスト夫妻は太平洋を渡って来たのであった。この当初からの関わりが、やがて、新島師らの発起になる仙台東華学校の開校に参画する決意をするについて、博士に影響を及ぼしたであろうことは想像に難くない。かくて一八八六年、デフォレスト一家は仙台に移り、東華学校廃校後も該地に留まって宣教活動に献身することになる。仙台はデフォレスト夫妻の終ついの住すみ処かとなり、その遺骸を抱きとった地元の墓が、後年、夫妻の愛娘にして非の打ちどころなき後継者シャロット・バーjis女史の遺灰をも受け入れるに至ったことを思う時、人の世の縁えんの中に作用する、ある絶妙の技に心を動かされる。

デフォレスト女史の人生の途の出だしはかくの如くであったが、その道程はこの世の歲月の九四年四か月に余り、その全てが、幼くは両親を通じて、長じては自らの決断によって、神と人に向けられ、日本に結ばれ、神戸女学院のために捧げられて、私事の枠を超えたものであったから、その生涯の出来事を網羅すれば、箇條書にしたところで、この小冊子に許された紙数の盡きてしまうことは間違いない。

女史に関する断片的な追懷談や回顧録は無数に見い出され、今はまだ口伝えに聞くこともできるが、伝記体にまとまった記述としては、岡本道雄著「C・B・デフォレスト」(キリスト教学校教育同盟編『日本キリスト教教育史 人物篇』三三七―三四三頁)、回想録風な自伝「シ、ビ、デフォレスト」(神戸新聞学芸部編『わが心の自叙伝』一八七―二〇七頁)をあげることができるのみ。今後本格的な一代記の編まれることを期待して、史料の検索整備につとめてみたいと思う。

永生の門 デフォレスト先生の計を聞いたのは、神戸女学院が、コーベカレッジ・コーポレーション(KCC)との

第一回コンサルテーションのために沸きかえっている時であった。コンサルテーションの開会の祈禱にはデフォレスト先生のための祈りが加えられ、学院は、夏休み明けの九月十八日に追悼記念式を執り行なうことを決めた。今から一五年前の一九七三年夏、学院創立百周年を二年後に控えた、小宮 孝院長の時代であった。

現在、手元に、この追悼記念式の模様を録音したテープが残っている。学院主催の式典の大方に記録係を仰せつかつてきた筆者、この時に限って、ステージの袖でテープレコーダーの操作に携わっていたこともあり、当時の世話役方の意向もあって、詳細の報告を作成しなかった(デフォレスト先生には大変申しわけないことであつたと悔んでいる。)が、このテープと、「神戸女学院学報」第五三号(一九七三年十二月発行)によって、式の次第、そしてまたデフォレスト先生帰天の様子を知ることができる。

追悼式の様子はしめやかに美しく心にしみる。しかしとりわけ、芹野俊郎牧師の祈禱と茂 洋チャプレンの式辞は美しい。全文を掲げる余裕のないことを惜しみつつ、その章句を想起することで、この項の結びとしたい。

「シャーロット・B・デフォレスト先生は、詩篇の二三篇を聴きながら、九四歳の生涯を終えられました。…何よりも聖書を読むことに徹しておられた先生が最後に選ばれたのがこの詩篇でありました。この詩篇の二三篇は先生の生涯をあらわすにふさわしいものであつたと思います」と口を切られた茂先生は、デフォレスト先生は神と日本とを心から愛された—と言ひ、否、「心から」では足りない、「情熱をこめて」と言えよう—と言ひ直し、「先生こそ神戸女学院の立学のモットーである愛神愛隣を地でゆかれた方であることを教えられ」たと証しなされる。また、デフォレスト先生が五十年來の友であつた藤田トキ先生の追悼文におつけになつた詩、

年経るごとに友を喪なう

されど信仰によりて共にパラダイスに在りて

友の交わりを深めるはいかに美わしきか」

を引いて、「今、先生を喪ないました私たち、先生の作られたこの詩を、もう一度私たちがうたいたいような気がいたします」と。そして更に感銘深い結語。――

「先生は生涯の終わりに重大なことを私たちに教えて下さったことを最後に述べたいと思います。先生がなくなられたというニュースはなかなか私たちの耳に入って来ませんでした。やっとそのニュースが入った時、ほぼ同時に、先生の遺骨が遺言にそって仙台東三番丁教会に航空便で送られて来ました。：私たちは大変驚きました。しかし私はこの事柄の中に、先生の生涯の終わりが実に美しく描かれているように思うのです。：それは、先生の生涯は、人に賞讃されることではなくて、神を讃えることであつたということです。人知れずそつと自分の遺骨をすでに用意された墓地に埋めてほしいと願われた先生の深い信仰の理解に、私は大変心を打たれるのであります。詩篇二三篇の終わりは、先生の終わりをあらわすにふさわしいものであると思うのです。

「わが世にあらんかぎり、かならず恵みと憐みと我にそいきたらん、

われはとこしえに主の宮に住まん」

先生の生涯のもっともすばらしい聖句ではないかと思ひます。」（：部、筆者による省略。）

宣教師たるの信念から引退後の余生を母国に託したデフォレスト先生が、こうしてその御両親の奥津城に帰省なさつたのは、一九七三年八月十一日のことであつた。「太平洋の架橋たらん」ことを志した父君の遺志にそい、海に正面して、墓地の通常の区画境界線に対しては斜めの向きに建てられたデフォレスト家の墓碑の、デフォレスト夫妻の名を刻んだ面の反対側に、我々は今、「シャーロット・B・デフォレスト」なる名を見ることが出来る。そしてそれはまた、あの追悼式の折りの芹野牧師の祈禱の一節を想い起こさせる。――

「私たちは、主が日本人を愛して、デフォレスト先生親娘二代にわたり伝道と教育のために全身全霊を捧げしめ給うた事実を思い、み名をあがめて深く感謝いたします。」

一、シャーロット・B・デフォレスト女史の遺産

いわゆる「デフォレスト文書」デフォレスト女史の遺産と言えば、何よりもまず、女史が生涯かけて身をもって示された模範、感化、薫陶の賜を、それから神戸女学院への具体的な貢献を考えねばなるまい。しかしながら本項では、学院史の史料を扱う者の立場から、女史の手に成る、もしくは女史のファイルに残された、文献史料の類――われわれが一般に「デフォレスト文書」と総称しているものについて若干のことを述べておきたい。

米国伝道会宣教師文書 米国伝道会宣教師文書のファイルの中にデフォレスト女史の筆跡をもとめると、現在マイクロフィルムによって公開されているのは一九一九年までの書簡類であるが、Miss DeForest, Charlotte B. なる項目の初出は、一九〇〇年―一九〇九年の巻で、ここには一九〇五年に書かれた二通が納められているにすぎない。しかし一九一〇年―一九一九年の巻では、本部における整理番号の三三号から八四号までを占め、マイクロフィルムのコマ数にして一一コマに及ぶ（この中には若干、他人の書簡が混在しているが）書簡を見ることができる。

但しこれは、女史のキャリアの中ではごく初期の部分を覆うものにすぎず、さらにこのうち、激動する日本の国情を踏まえつつ神戸女学院に大いなる変貌発展を遂げさせた女史の、もっとずっと長い期間の事情を明かしてくれるであろう文書類に接し得ない現状は、何とも心残りのことである。

とまれここでは、女史のキャリアの初めの一五年間に米国伝道会本部に受け入れられたその書簡の全体を、一覧表の形にまとめてみる。

〈整理番号〉	〈発信年月日〉	〈発信地〉	〈宛 先〉	〈備 考〉
一九〇〇—一九〇九の巻				
一七三号	一九〇五年 四月二十三日	神戸女学院	バートン博士	Dr. James L. Barton, D. D. クラーク博士の後任。
一七四号	十二月 七日	鳥取	バートン博士	旅先からの便り。
一九一〇—一九一九の巻				
三三三号	一九一〇年 五月 九日	神戸女学院	バートン博士	タイプライティング(以下タイプと略記)。
三四号	八月 九日	軽井沢	ベル氏	J・H・デフォレスト師の手紙。)
(三五号)	十二月 五日	仙台	ベル&バートン	発信人も受取側も一九一二年と明記。
三六号	一九一二年 十月 二日	ブルックライン	ベル氏	
三七号	一九一二年十一月 十六日	サンアンセルモ	バートン博士	
三八号	一九一二年 三月二十三日	バトルクリーク	ベル氏	
三九号	四月 三十日	ハートフォード	ベル氏	
番号なし	五月二十一日	ハートフォード	ベル氏	
四〇号	一九一六年十二月 六日	神戸女学院	ベル氏	
四一号	十二月 三日	神戸女学院	リー夫人	「W B M I への手紙のコピー」と附記。タイプ。
(四二号)	一九一七年 一月 二十日	京都	ベル氏	オーテス・ケリー師署名の手紙。タイプ。)
四三号	一月 三十日	神戸女学院	リー夫人	タイプ。
四四号	二月二十一日	神戸女学院	ベル氏	「コピー」と附記。タイプ。
四五号	二月二十一日	記載なし	リー夫人	「Contribution to the Kobe College Gymnasium
四六号	三月 三十日	神戸女学院	ベル氏	Fund」に関する印刷物。冒頭に手書き三行のメッセ

四七号	五月三十一日	神戸女学院	ベル氏	「Kobe College Founder's Day」のプログラム同封。
四八号	七月 六日	神戸女学院	バートン博士	タイプ。
四九号	七月 十一日	神戸女学院	ベル氏	タイプ。
五〇号	十月 一日	神戸女学院	ベル氏	タイプ。
五一号	十一月 二十日	神戸女学院	記載なし	「シャロット・B・デフォレスト女史よりの手紙のコピー」との表題つきで本文のみタイプ。署名もなし。
五二号	一九一八年 三月二十六日	記載なし	リー夫人	「バートン博士にコピー」と附記。タイプ。
五三号	四月 四日	記載なし	リー夫人	「バートン博士にコピー」と附記。タイプ。
五四号	四月 四日	神戸女学院	バートン博士	「バートン博士にコピー」と附記。タイプ。
五五号	四月 —	神戸女学院	記載なし	「For the Christian Movement in Japan' for 1918」と表記。署名部もタイプのみ。
五六号	四月 十九日	神戸女学院	バートン博士	タイプ。
五七号	五月二十五日	神戸女学院	バートン博士	タイプ。
五八号	五月 三十日	神戸女学院	リー夫人	「バートン博士にコピー」と附記。タイプ。
五九号	五月 三十日	神戸女学院	バートン博士	タイプ。
六〇号	六月 三日	神戸女学院	バートン博士	タイプ。
六一号	六月 三日	神戸女学院	バートン博士	タイプ。
六二号	七月 八日	神戸女学院	リー夫人	「バートン博士にコピー」と附記。タイプ。
六三号	七月 十九日	神戸女学院	バートン博士	タイプ。
六四号	十一月二十九日	神戸女学院	ベル氏	タイプ。
六五号	十一月二十八日	神戸女学院	ベル氏	タイプ。
六六号	一九一九年 三月 —	(神戸女学院)	記載なし	「Kobe College Board of Managers Annual Meet-

六七号	一九一九年 三月 十八日	神戸女学院
—	記載なし	記載なし
—	記載なし	記載なし
六八号	記載なし	記載なし
六九号	四月二十八日	神戸女学院
七〇号	四月二十九日	神戸女学院
七一号	六月 十三日	神戸女学院
七二号	六月 十三日	神戸女学院
七三号	六月 十四日	神戸女学院
七四号	七月 六日	神戸
七五号	七月 十七日	神戸女学院
六七号	八月二十三日	神戸女学院
(七七号)		記載なし
(七八号)	十一月 十五日	シカゴ

リー夫人	記載なし
記載なし	記載なし
記載なし	記載なし
リー夫人	記載なし
ベル氏	記載なし
リー夫人	記載なし
ベル氏	記載なし
ベル氏	記載なし
「Dear Kyodai」	記載なし
リー夫人	記載なし
バートン師	記載なし

ing, March 8, 1919.” 報告書。
「バートン博士、モーゼス・スミス夫人にコピー」と附記。タイプ。
“Addresses for the Kobe College Annual Reports for 1918” なるリスト。手書き。
“Portions of Miss DeForest's Letter of April 28, 1919” との表題づきの一文。タイプ。署名なし。
“A Christian College for Women in Japan” なる表題づき。タイプ。
「ABC FM にコピー」と附記。タイプ。
「ABC FM にコピー」と附記。タイプ。
H・ヘドレー師と連署。タイプ。
タイプ。
タイプ。署名もタイプののみ。
「アメリカンボードにコピー」と附記。タイプ。
“Five-Year Estimate for Current Expenses”, “Extracts from the Japan Evangelist.” 及び大蔵谷附近の手書きの略地図の添附あり。
「ABC FM にコピー」と附記。タイプ。
“Translation of a Letter from Dean Kimura of Kobe College to C. B. DeForest, under date of Aug. 4, 1919.” エム・ザ・
モーゼス・スミス夫人の手紙。署名もタイプ。)

七九号	十月 九日	神戸女学院	リー夫人	タイプ。
八〇号	十月 二十日	神戸女学院	リー夫人	タイプ。
未明	十月 二十日	神戸女学院	スター女史	タイプ。
未明	十月二十五日	神戸女学院	フレミング・H・レヴェル社	<i>The Evolution of a Missionary</i> の件。
八二号	十月三十一日	神戸女学院	ベル氏	
(八三号)	十一月 七日	神戸女学院	リー夫人	S・A・ソール女史の手紙。「ベル氏にコピー」と 附記。タイプ。）
八四号	十一月 十五日	神戸女学院	リー夫人	「ABCFMにコピー」と附記。タイプ。

神戸女学院図書館所蔵文献 ここでは、デフォレスト女史の手に成る書籍文献類のうち、神戸女学院図書館に受け入れられているものを、図書館のカードに基づいて、列挙する。従ってこれらは、様式形態の如何を問わず、いずれも個別に独立完結したものに限られ、米国伝道会の機関誌類—*Missionary Herald*, *Japan Mission News*, *Life and Light for Woman* 等や、神戸女学院同窓会誌『めぐみ』及びこれに類するものに所収された、折り折りの寄稿についての言及は、今回は割愛する。枚挙にいとまのないためである。これらはいずれ、タルカッタ女史 (*Miss Eliza Talcott*) の例に準じて文献別索引が作成される折りには、網羅されることになろう。

☆和書の部

- 『西洋禮法』デフォレスト (DeForest, C. B.) ルーミス (Loomis, C. D.) 共著。東京、日本基督教興文協會、大正九年。
- 「所感」—『兵庫教育』大正十一年十月臨時増刊「學制頒布五十年記念號」。神戸、兵庫教育雜誌社、大正十一年。
- 「母を憶出でて」—『基督教世界』昭和十四年五月十一日。
- 「學校における禮拜」—『基督教世界』昭和十四年八月三日。

「シ・ビ・デフォレスト」『わが心の自叙伝』神戸新聞学芸部編。神戸のじぎく文庫、昭和四十三年。

『パン種としての日本女性―日本の近代化に活躍した女性たち』別府恵子、頼広節子共訳、岡本道雄監修。東京、春秋社、一九八四年。（原著 *The Woman and the Leaven in Japan* は洋書の部参照。）

「蜘蛛の圖」デフォレスト先生蒐集。（10×12のカード五四枚。一枚毎に細かく蜘蛛の姿が画かれている。）

☆洋書の部

The Evolution of a Missionary, N. Y. Fleming H. Revell Co, 1914. (父 J・H・デフォレスト師の伝記)

Eliza Talcott: Founder of Kobe College, Nishinomiya, Kobe College, 1919. (スクラップ・ブック)

The Woman and the Leaven in Japan, Mass., The Central Committee on the United Study of Foreign Missions, 1923.

Mrs. Moses Smith (Emily White Smith), Nishinomiya, Kobe College, 1934. (スクラップ・ブック)

Kobe College Records of the Building Campaign, Kobe College, 1948. (スクラップ・ブック)

The History of Kobe College, Comp. on the Occasion of the 75th Anniversary of Kobe College, 1950, Chicago, Kobe College Corporation, 1950.

Workmanship—In Travis Jirel Comp, This Singing Earth, Alpine, 1959.

Poem down the Years, Nishinomiya, Kobe College Alumnae Association, 1960.

The Prancing Pony, Nursery Rhymes from Japan, adapted into English verse for children by Charlotte B. DeForest, with "kusa-e" illustrations by Keiko Hida, Tokyo, J. Weatherhill, 1967.

神戸女学院史料室受託未整理文書^{おんしよ}

先にも述べたように、デフォレスト女史は、神戸女学院在任中に入手した様々な文書類の全て（もしくは殆んど全て）を、処分することなく残してゆかれた。それらは学院史のための貴重な史料になるものとして逐次史料室に移管されることになった。史料室が仕事を始めて間もなく、院長室から届けられた長持大の木箱二つがその先駆けであったが、最近の庄巻は、数年前、総務部の倉庫の大整理と称してダンボール箱につめられて運びこまれた文書類で、これらは史料室の狭い部屋の半分を占めて山を成した。

その内容は、来信、発信の控、学院内配布印刷物、そのためのメモ・下書き・案、議事録抜萃、経理関係書類、教会や伝道会関係の文書、新聞・雑誌等の切り抜き……等々と多種多様をきわめ、単に神戸女学院のこのみならず、しばしば、社会的に、あるいは国際的に、興味深い話題を提供してくれるものも見い出される。これらはたいていの場合、厚紙二つ折りのファイルに項目別に分けられはさみこまれていたが、一件一件はバラバラなままであった上、ファイルの並べ方の順序は必ずしも系統的ではなかった（これは、ファイルを預かっていた部署の保管の手際によるものかもしれないが）ため、秩序ある分類整理をするためには、まず、これらを散佚させずに自在に見られるよう、手段を講ずるところから始めねばならなかった。文書をいかなる形にもせよ損ないたくはなかったので、一枚一枚を透明なビニール袋に入れ、この袋を留め金つきのファイルに綴じ込み、こうして見易くしておいて、ファイル一冊毎にその内容目次を作ることにした。

はじめの木箱二つ分は、B5の紙製ファイルに納めて五〇冊に及び、その目録だけでまた一冊のファイルができた。総務部より寄託されたものは、その量の多さに加えて、搬入の際の手順の不適切による混乱とその後の史料室の人手不足によって、未だその整備を完了していないが、一応綴じ込み作業の終わったものは、A4の紙製ファイル四九冊を占めている。綴じ込みを完了した時点で改めて全内容をチェックして系統だった分類をし、目録を作成する手筈であるが、その完成にはまだかなりの時日を要することと思われる。